TOEICを視野に入れた英語授業[1)]

平岡禎一*　鳥越秀知*　畑　伸興*　森　和憲*

English Classroom Activities and TOEIC Test

Teiichi HIRAOKA, Hidetomo TORIGOE, Nobuoki HATA and Kazunori MORI

Synopsis

TOEIC test has been attracting a great deal of attention, not only from Japanese learners of English, but from Japanese teachers of English. Students try to gain higher scores, while teachers try to provide the students with more effective, suitable exercise. Still, the result has not been so successful in our college so far. This paper describes some of the activities in the lesson of our English Department which are focused on improving particular aspects of skills needed for TOEIC test.

1. 高専英語教育の実態と TOEIC

高等専門学校（以下，高専）における英語教育は様々な方面から批判を受けてきた.そして，それらの批判の多くが的を得たものであること，つまり，高校生と比べても，全般的に英語学力が劣っていることがすでに明らかになっている.国専協(2002)は,「基礎力テスト」(中学レベルの言語材料の定着度を測定)と「運用力テスト」(高校レベル)という 2 種類のテストを作成し,関東甲信越地区 10 高専(各学年 1 学級, 5 学年)の学生を対象に学力テストを実施した．その主な結果は以下のとおりである：

(1)基礎学力に関しては，音声面(発音･アクセント)において,高専生と高校生の学力差は比較的小さいが,その他の面(語彙･文法･文型･構文･慣用表現･応答表現)においては,学年に関らず，高専生の学力はかなり低い

(2)高専生は運用力に関しては，1，2 年生と緩やかに上昇し，3 年が最も高く，4，5 年生では低下する

これらの結果を見ると，高専英語教員の９割が教育目標を達成できていないと感じているという，COCET(2002: 20)の数値は誇張ではなく，学力を的確に把握している結果であると言えよう.

そのような状況下, 高専は 2004 年 4 月, 独立行政法人国立工業高等専門学校機構（以下，機構）としてスタートを切った．この機構が定めた「中期計画」の中で，英語教育は,「教育課程の編成等」の項において，以下のように言及された[2)]:

> 各分野において基幹的な科目について必要な知識と技術の習得状況や<u>英語力を把握し</u>，教育課程の改善に役立てるために，学力実技能力の調査方法を検討し，その導入を図る．また，<u>英語については，TOEICなどを積極的に活用する</u>.（下線付加）

高専における英語教育について，機構本部が並々ならぬ関心と意欲を持っていることが伺える.と同時に,一技能検定試験に過ぎない TOEIC が言及されていることには驚きすら感ずる．なぜ TOEIC なのか.

COCET(2002: 28)によると, 高専生が就職してゆく企業（451 社）のうち,「採用時に英語力を考慮する」と答えた企業は４割程度であり，必ずしも圧倒的な数値ではない.ただ,「考慮する」と答え企業については，実に７割を超える企業が TOEIC での成績を筆頭に掲げている（英検は

---

*一般教科

５割程度）．この調査からも，企業において TOEIC が大きな位置を占めていることは伺える．

本校でも平成 14 年度から IP テストの実施を開始した．そして平成 17 年度からは本科４年生，および専攻科１年生に IP テストの受験を義務づけることとなり，いよいよ本格的に TOEIC を教育課程の中に位置づける取り組みをおこなうこととなった．

教育課程の中に取り入れる以上，以下のような点について，教授者と学習者が認識を共有することが必要である：

（１）TOEIC はどのような学力を測定するテストなのか

（２）TOEIC が測定する学力を伸ばすためにはどのような学習・訓練が必要なのか

（３）どのような学習・訓練をどの程度おこなえば，どの程度学力が伸びるのか

これらの点を全く意識せず，ただ闇雲に授業をおこなうだけでは学習効果は期待できまい．本論はこれらの点を視野に入れながら，英語科全体としてどのような授業をおこなっているか，その現状と問題点について考察することを目的とした実践報告である．

２． ディクテーションによる聴解力の訓練

2.1. 何を目指した活動か

TOEIC という検定試験の特質の一つであり，かつ，高専生にとって最も克服するのが困難だと思われものの一つが「英語を処理する速度」である．リスニングの部について見ると，15 分程度経過すると，一部の学生は明らかに集中力を失ってしまい，ふさぎ込む．英語音声を処理する速度では，全く太刀打ちできないことに愕然とするのである．実際，井上(2004)が示すように，オーラルコミュニケーション用の検定教科書に付属する音声と比べた場合，TOEIC の音声スピードは圧倒的に速い．またリーディングの部についても時間が足りず，問題を読む時間すら持てない学生も多い．TOEIC で高得点を目指してゆくためには，この英文処理速度をあげることが不可欠なのである．

この英文処理速度を遅くする要因の一つに母語の介入(interfere)がある．一般に，初級学習者ほど母語への依存度が高く，語彙レベルはもとより，句構造や節の認識においても，頻繁に日本語を参照する傾向がみられる．そして，この日本語の参照，つまり日本語の聴覚映像(acoustic image)への依存度が強ければ強いほど，必然的に脳内で英文の聴覚映像を保持する機能は削減されてしまう．英語音声（語→句→節→文）を聴く度に日本語音声の映像が形成されてしまうと，断続的に供給される英語音声を瞬時に処理することは一層困難になる．

では，一体，日本語が介入しない，「英語を英語で理解するための回路」を作るためには，どのような訓練が必要なのだろうか．現時点では経験的な「作業仮説」の域を出ていないが，「英語の入力を英語のまま出力する訓練」が最も効果的であるように感じる．入出力，それぞれが「音声・文字」であり得るので，この訓練は図１のように大きく４つに分類できる：

表１．入出力の媒体と訓練の種類

入力	出力	具体的な訓練
音声	音声	シャドウイング
音声	文字	ディクテーション
文字	音声	音読
文字	文字	筆写（copying）

これら４つのタイプの入出力訓練はいずれも近年注目を集めている技能訓練である．それぞれどのような技能の伸長にどのように関与するか，まだ十分な研究が行われているとは言い難いが，本章では主にディクテーションについて，どのような形で技能の伸長を観察しうるか，具体例を挙げながら考えてみたい．

2.2 実践例

2.2.1 中学の教科書使った実践

過去数年間，3 年生の授業において，中学 3 年生の教科書をディクテーションの教材として使用してきた．その理由としては，①平易な語彙（1,000 語程度），②親しみの湧くテキスト，および③他の訓練（シャドウイング，暗唱，筆写など）への転用性，などがある．中学 3 年生用の教科書を使うと聞いて，当初は怪訝な面持ちを浮かべる学習者も，いざディクテーションをおこなってみると，自らの技能が不足していることを痛感せざるを得ないため，徐々に真剣

な姿勢で臨み始める．

どのような技能が不足しているのか，具体例で考えてみたい．以下は地球環境を扱った文章の一部である：

From the sky we can see the damage that we have done to our planet. The home planet looks very sick. One astronaut said, “Madagascar is still green, but probably it won’t stay that way for long. The sea that touches the island is dark red(1). It’s the color of the mud which is carried down from the bare hills.(2) Many kinds of birds and animals living in the forests will soon die out.” (*The Sunshine English Course 3*)（下線付加）

わずかな分量の文章ではあるが，ディクテーション活動を行わすことにより，実に様々な学力の諸相を観察することができる．例えば下線部(2)の文（音声入力）を処理すると，以下のような典型的な誤り（出力）が現れる：

(2’) It’s the color of the mad(A) which is carry(B) down from the bear(C) hills.

これらの誤りは,誤りそれぞれ(A)音韻知覚能力の不足,(B)構文解析(余剰生予測)能力の不足,および(C)音調（イントネーション）知覚能力の不足，などを表していると考えられよう．この内，特に（B）は難易度が高く，成績がかなり上位の学習者でも誤る傾向にある．

下線部(1)の文に見られる以下の誤りは複合的である：

(1’) The sea that touch is the island is ...

偶発的な単音の類似性（*touches* と *touch is*）が統語の持つ余剰生と拘束力（関係代名詞としての *that*）を完全に上回っていることが伺える．つまり，文頭で「The+NP+that」という文字列が続いたで,「*that* は関係代名詞であり，NP を修飾する節が続く」といった，統語的予測力(expectancy)が全く機能していないと言えよう．

2.2.2 「えいご漬け」を使った実践

中学の教科書を使った実践の問題点の一つは,個々の学力に対応した練習の不足である．この問題を解決するために，本プロジェクト経費により,「えいご漬け」(48 ライセンス）を購入した．このソフトの内容は,「聴こえてきた音声をタイプ入力する」という，非常に単純なものである．利点は，①個々の学力に合わせ，様々な練習モード（単語，文，単語＋文；日本語訳の有無，など）を設定できる，および，②聴き取れ，入力し終わるまで，繰り返して音声を聴くことができる，などを指摘できよう．一ヶ月程度の実践から判断するのは早計だが，学生の反応は非常に良い．

2.3　今後の課題

ディクテーション活動を取り入れた授業を展開する上での課題を整理すると以下のようにまとめることができる：

①教師や教材の音声を一斉に処理させるだけでは，個々の能力に応じた訓練をおこう

②個々の学習者の出力ミスを量的・質的に把握する

③聴解能力との相関関係を数量的に実証する

これらの課題を克服するためには，コンピュータを利用する以外に方法はないように思える．市販のソフトなども活用しつつ，マルチメディア教室の機能をどのように駆使した授業を展開してゆくか，検討する必要がある．学力を評価する手段としてのみでなく，英文音声を処理する速度を高めるための訓練としても，ディクテーション活動を積極的に授業へ取り入れてゆきたい．

３．　熟語小テストによる語彙力の訓練

時代の要請として，使える英語力が求められている．コミュニケーションの手段としての英語の重要性が指摘されている．TOEIC によって学習者の英語力の判定がなされる傾向が増加しているために，TOEIC の面での教師の対処が必要となってくる．だが，そのための問題が幾つかある．

第一に，教室内では教科書を利用して基本事項の教授をしなければならないということである．高い英語力を有する学習者ばかりではないので，TOEIC に焦点を当て，学習者に TOEIC 練習問題のみを提供するわけにはいかない．この点で社会人が TOEIC を受験する場合と異なる．

また，教室の中だけの英語学習で英語力がつくわけはないのは明白であり，教室外でも学習者自らの英語に対する努力が必要とされる．

次に，TOEIC のリーディングテストを高等学校の学生や高等専門学校の低学年の学生に直接に適用することには少し無理があると考えられる．なぜならば TOEIC のレベルがそれらの学生にとっては高すぎて難解である．この点はどんなに強調しても強調しすぎるということはない．

以上のような理由から，教室内で行え，しかも TOEIC を視野に入れた学習指導が必要となる．本章では，語彙力増強のために，40 人程度の学生に対して一斉にリーディングの訓練を効果的におこなう方法について考察していきたい．ここではその方法の一つとして，本章では，学習者に熟語集を与えて自学自習させ，授業中に実施する小テストの実践について述べる．

3.1　読解力の養成

TOEIC のリーディングテストで高得点を得るためには日常的に多量の英文を読んで語彙に対する語感を養い，読解力を向上させることが必要とされる．同時に，語彙や熟語の学習と訓練を多くこなす必要があり，読解力を高めるための様々な方法が指摘されてきた．その方法の 1 つとして，単語集や熟語集を利用して意識的に語彙の整理をするなどして，語彙力を向上させる方法がある．

3.1.1 語彙能力の向上の必要性

語彙力は，読解力を構成する重要な基本要素である．語彙の指導を抜きにして，読解力の向上はありえない．早くも，西田（1984）では，Davis(1972)や Layton(1969)や Harris(1869)に言及し，語彙の意味の理解が読解力の向上につながることが指摘されている．語彙の指導に対する関心という傾向は衰えることなく，過去数十年間の間様々な研究や実践が行われてきた．最近では，JACET8000 基本語改訂委員会（2003）による語彙リストの作成，大学英語教育学会基本語改訂委員会(2004)の語彙の活用方法など，教育の分野で効果的に用いる方法が研究されてきた．

教室における語彙力の増強のための簡単な日常的に利用できる手法が求められている．それが如何に優れた手法であろうとも，準備をあまり要しない簡単なものでなければ永続的な教授手法とはなりえない．

3.2 小テストの実践

平成 16 年度において，2 年生 168 名を対象に熟語の小テストを意識的に実施した．2 年生は，1 クラスのサイズが 38～48 名から成る 4 クラスで構成されている．

3.2.1 教材

使用した教材は花本金吾著『英熟語ターゲット 1000（３訂版）』という大学入試のための熟語集である．この教材を選んだ理由は，重要な項目が適切に提示された教材であり，多様な学習者に対応できる点である．基本的な学習方法は下記の 4 点である．

(1) 熟語を覚える
(2) 対応する日本語の意味を覚える
(3) 例文を読み文脈の中で理解する
(4) 解説をできる限り活用する

下位の学習者や意欲に欠けた学習者は(1)と(2)のみで済ますこともできるが，それでは物足らない上位の学習者や意欲的な学習者の場合は(3)と(4)までを合わせて学習することができる．以下に当教材の一例を挙げる：

① look down on / upon
② ～を軽蔑する
③ We should never look down on others because they look different.　身なりが違っているからといって，我々は決して他人を軽蔑するべきではない．
④ ▼＝despise「(高台などから）～を見下ろす」は look down at ~が普通．

（花本(2001:126-127)）

個々の項目の提示方法は非常によく工夫されていて，見開きの左のページに①と②と④が記載され，右のページに大学入試に出題されたその熟語を含む英文③が記載されている．文脈を除外した英熟語のみの暗記が難しいことは経験的に知られていることであり，右のページに文脈が判る文が記載されていることは学習者にとって非常に有益である．

3.2.2 指導手順

ここで述べる小テストは，約 40 個の熟語から成る学習範囲のうち，10 個の熟語を B６のサイズの白紙に教師が発音し学生にそれを書かせ，

その意味を隣に書かせるという単純なテストである．その手順は以下のとおりである．

(a) 学習者の予備学習
(b) 小テストの実施
(c) 学習者による採点作業

学習者がおこなう(a)が英語学習に対する態度が分かれる点である．まじめに意欲的に熟語学習に取り組む学習者と関心をほとんど示さない学習者に分かれるのである．(b)では学習者が英語を書くという点で，選択問題に慣れた学習者の弱点であると言われているつづり字の訓練になり，教師の発声を聞いて理解するという点で聴解力の訓練にもなる．数回熟語を発音したが，1 回目は発話速度を速くし，その後次第に速度を落とす手法を用いた．(c)では，英熟語 10 個の配点を10点，対応する日本語の配点を10点，計 20 点満点とし，隣り合う学習者による採点とした．お互いに得点を競い合い，好ましい学習環境が成立していると感じられる場合も多々あった．

小テストの実施回数としては，週３時間の英語Ｉの授業で，２回行った．２時間連続の授業では，実質的に２回小テストを実施することは難しかったのである．教師が発話する熟語を学習者が英語で書き，対応する日本語を書くという形の小テストを過去１年間実施してきた．これによって，学習者にとっては小テストは１つの学習習慣として定着し，英語学習に幾分でも寄与していると考えられる．

上記の小テストの利点は，到達すべき目標が明確に提示されているので，努力すれば高い得点が得られることからまじめな学習者にとって学習しやすいという点が挙げられる．また日々の学習が中間試験や期末試験に反映されるという点でも動機付けになっている．さらに，学習意欲に欠ける学習者にとっても，熟語は既知の単語から成っている場合が多いので，対応する日本語の意味を覚えていなくても英語では書きやすく，如何に僅かでも達成感を得やすいという利点がある．一方，教師側の利点としては，白紙の紙を準備しさえすればよいので，日常的にかつ永続的に利用できる点が挙げられる．

熟語の小テストは昔から行われてきた方法である．長く続けられていることはその有効性がある程度認められていることを示すと考えても良い．同時に手軽であり，教師には準備をあまり要しないので，長く利用されてきたと言える．

中間試験や期末試験に，試験までの数ヶ月に学習した熟語を出題している：

［中間試験の熟語出題例］

○１～５は下線部の意味を下より選び，その記号を書け．

1. <u>As a rule</u>, children learn how to use money.
2. Choose a ball out of this bag <u>at random.</u>
3. <u>In a sense</u>, we are all historians.
4. A destroyed ecosystem means a destroyed economy, <u>in the long run</u>.
5. She answered, wondering what <u>in the world</u> he meant.

(a)結局は	(b)一体全体	
(c)ある意味では	(d)無作為に	(e)概して

これは，小テストのために学習した熟語を学習者に再確認させ定着率を上昇させることを目的としている．熟語 20 問を配点 20 点の選択問題という形式で出題しているため，学習者も範囲内の熟語を学習することになり，よりいっそうの学習効果が期待できる．

以上の小テストの活動の後，新たに次のような学習者が現れるという問題に直面した．

(A) 直前にのみ必死で暗記する学者
(B) 完全に小テストを放棄する学者

(A)に関しては，暗記には時間をかけてする必要性があることを教えたが，どこまで理解してくれたか判らない．一方，(B)に関しては，英語学習に対する意欲の全体的な欠如を示しているわけであるから，簡単な対処方法は見当たらず，時間をかけて指導していく以外にはないと考えられる．

3.3 今後の課題

以上 TOEIC を視野に入れたリーディング力の向上のための方法として語彙力の増強を目的とした小テストの実践について述べてきた．その学習効果については計測実験を行っていないため，明確なことは言えない．しかし小テストを実践する前と比較して，実践して数ヶ月後には学習者がともかくも熟語集を広げて曲がりなりにも覚えようと努力している姿を目にし，英語学習に取り組む熱意が向上していると感じられ

た．先に述べた問題の対処方法を考え，解決方法を含めて，今後は語彙力増強のための小テストの効果を実証する研究をおこなう必要がある．これらを今後の課題として，継続的に小テストの実施を続け,その研究に取り組む予定である．

４．TOEIC における文法力

4.1　はじめに

TOEIC テストは，周知のように,「リスニング・セクション」と「リーディング・セクション」に分かれている．時間配分は「リスニング・セッション」45 分,「リーディング・セッション」75 分である．いずれも 100 問の問題を解答する形式となっている.「リスニング・セッション」は Part　I～Part　VI で構成され､「リーディング・セッション」は Part　V～Part　VII で構成されている．

今回は,「リーディング・セッション」の学習により，文法力の養成および強化を目的とする授業を展開した．

4.2　授業展開について

文法力を身につけることは，英語学習において，不可欠なものである．しかし，文法事項は多く，それを完全にマスターしようとすると，時間がかかる．「時間がかかる」と述べたが，たとえば本校の 4 年生・5 年生ならば，実は中学校の頃より英語を始めているわけであるから，実際はかなり多くの時間をかけて，ある程度の文法事項は既習しているはずである．しかし，学生の多くは，文法力の大切さに気がついていないのである．

TOEIC テストの「リーディング・セクション」が Part　V～Part　VII で構成されていることは先ほど述べたが，もう少し詳しく述べると，Part V は「空所補充問題」，Part　VI は「誤文訂正問題」，そして Part　VII は「読解問題」となる．Part　V は文字通り，「問題文の空所に 4 つの選択肢の中から，適当と思えるものを選んで解答する」という形式になっている．Part VI は「問題文の 4 つの箇所に下線が引かれており，その 4 つの中から間違っている箇所を選んで解答する」という形式となっている．Part VII は「問題文を読み，設問に答える」という形式となっている．

今回 4 年生の「英語特論」の授業では，文法力の養成および強化を目的とする授業として主に使用したのは Part　V である．Part　V はすでに 4 つの選択肢が与えられ，その 4 つのどれかは必ず正解であるので，比較的解答しやすいし，また問題を解く際に，その問題から学習できる内容が理解しやすいと思われるからである．いくつか問題を見てみよう：

All passengers with connecting flights should reschedule _____ flights with the gate attendants.
(A) his　(B) my　(C) their　(D) his or her
（接続便をご利用の乗客の皆様は、ゲートの案内係の所で、飛行スケジュールを立て直していただかなければなりません）

これは空港内でのアナウンスであるが，問題としては代名詞の問題であることは，一目瞭然である．常々授業の折に言っていることは，「まずは主語と動詞を発見する」ということである．この問題に関しては, 主語が All passengers であるので，空所の解答は(C) their である．

We have received the flight information and are looking forward _____ you when you arrive.
(A) to see　(B) seeing　(C) to seeing
(D) to be seen
（到着予定時刻についてはうかがっています．到着なさった際にお目にかかるのを楽しみにしております）

この問題は「～を楽しみにして待つ」という意味の *look forward to …*というイディオムがわかっているかということである．この to の後ろには不定詞が続くのではなく，名詞か名詞相当語句がくる．したがって空所の解答は(C) to seeing である．

The company’s profits have been down for the last two quarters, _____ we’ll have to make do with smaller or no bonuses this year.
(A) so　(B) because　(C) so that　(D) because of
（ここ 2 回の四半期で、会社の利益は下がり続けているので、今年のボーナスが少なかったり、な

かったりしても我慢しなければいけない)

接続詞を空所に入れる問題に関しては，問題文を訳してみないと解答しにくいものが多い．この場合は，文の前半が原因，後半が結果になっているという関係を，訳すことによって理解できれば解答しやすい．(B) because を選ぶと原因と結果が逆になることに注意させる．(C) so that は目的を表すのでおかしいし，(D) because of は句であるので，節を導くことはできない．したがって空所の解答は(A) so である．

4.3　今後の課題

「英語特論」という科目は週１時間の授業である．Part Ⅴの問題を40問授業で行った．40問でさえ，その文法事項の範囲は多い．したがって問題を数多く解くことによって，文法事項を理解する必要がある．今後は授業だけでなく，家庭学習および補習を積み重ねることで多くの問題を解くように，モチベーションを高める方策を考えたい．

５．シャドウイングによる聴解力の訓練

TOEIC のリスニングテストで高得点を得るためには相当量のリスニング訓練をこなす必要がある．そのためにはLL教室等で，音響設備を駆使し，さまざまなマルチメディア教材を通してリスニング力を向上させていかなければならない．しかしその一方で，そのような活動をおこなうことができる教室の数には限りがあり，一人の教師がすべての英語授業を，設備の整った教室でおこなうことは困難であろう．多くの英語教師は普通教室において，ポータブルCDプレーヤのような簡便な音響装置を用いてリスニング活動を行っているのではないだろうか．そこで，当項目では，ごく一般的な教室において，一クラス 40 人程度の学生に対して一斉にリスニングの訓練を効果的におこなう方法について考察していきたい．ここではその方法の一つとして，近年注目を集めているシャドウイングを取り上げる．

5．1シャドウイングについて

シャドウイングとは，学習者が模範となる音声（モデル音声）を聞きながら，ワンテンポ遅れて，そのモデル音声に影のようについていきながら発声する訓練法である．モデル音声を聞き終わった後で鸚鵡返しに発声するリピーティングとは異なり，聞いている最中に発声を始めるという点に特徴がある．また基本的にモデル音声の文字情報（テクスト）は提示されないので，学習者はモデル音声を聞き取ることに集中することを余儀なくされる．

近年このシャドウイングはリスニングのトレーニングとして注目され，科学的にもその効果が研究されている．例えば柳原(1994)は英語聴解力の向上に関し，ディクテーションとシャドウイングの効果を比較した実験を行い，シャドウイングのほうがより聴解力を高める効果があったと報告している．実験結果の考察において彼女はその理由について,「シャドウイングという作業が，音声の入力と出力という二つの作業をほぼ同時に行い，且つ，出力した自分の音声をもう一度入力することであるため，結果として聴覚的感覚記憶への刺激をいくども得ることとなり，その認知過程において，より正確なボトム･アップ処理がなされ得るためと思われる」（柳原 1994：87－88）と述べている．

一方，シャドウイングがリスニング能力のみならずリーディング能力の向上にも貢献するという考察もある．門田（2002）ではシャドウイングの効果を実証した倉本・松村（2001）や玉井（2002）に言及し，シャドウイングが言語処理に重要な役割を果たすワーキングメモリーの操作能力を向上させることにつながると考え，同じくワーキングメモリーの能力に影響されるリーディング能力も「シャドウイングなど音声処理の下位技能を積極的に鍛えることで，さらに強化できる可能性は強い」(門田（2002：218）と示唆している．

以上のように，先行研究の結果とその考察を見ても，シャドウイングはリスニングの指導に有効な手段と考えられる．

5．2シャドウイングの実践

5．2．1教材

平成14年度において，1年生の170名を対象にシャドウイングを重点的に行った．一クラスのサイズは42～43名である．用いた教材は，ジオス教材開発研究室編（2003)『しゃべりたい人の英語の教科書入門編』である．この教材を選んだ理由は，シャドウイングには適量だと考えら

れる分量の会話文が課毎に収録され，かつ音声CDも付録されているため，授業中のみならず自学習でもシャドウイングの活動を促すことができるという点にある．以下は当教材のLesson９に収録されている英会話文のテクストである：

Justin: What are you looking for?
Karen: Some flowers for my host mum. Which do you like better?
Justin: Well, I like the yellow ones. What color does she like?
Karen: I don't know so I'll just get the yellow ones.
ジャスティン：何探してるの？
カレン：ホストマザーにお花を．どっちがいい？
ジャスティン：う～ん，黄色のほうかな．彼女は何色が好きなの？
カレン：知らないのよ．だから黄色にしとくわ．
ジオス教材開発研究室編（2003:42）

このように，同教材には様々なシチュエーションを想定した会話文が 40 個ほど用いられている．

5．2．2　指導手順

指導においては，上記の教材を用いていきなりシャドウイングをおこなうのではなく，段階的に音声指導を行いながら，最終的にシャドウイングになるように心がけた．手順としては

① サイレント・リーディング
② リピーティング
③ シャドウイング

の順で行った．①のサイレント・リーディングは，いわゆる黙読で，学習者はテクストを見ながらモデル音声を聞き，会話の内容を把握していく活動である．当教材では日本語訳も学習者には与えられているため，ここで学習者は会話文の内容を把握することができる．そうすることにより，以後の活動では，学習者は聴く事にのみ集中できるようになるので，特定の音素やリエゾンといった，より細かな音声項目の指導が可能となる．授業中にはこのサイレント・リーディングを３回繰り返した．

②のリピーティングに関しては，狭義の意味ではテクストを見ずに，モデルとなる文章の発話が終わった時点で学習者が発話を始める行為であるが，ここではあえて注意すべき音素や，フォニックスを指導するためにテクストを提示した．そして学習者には，まずモデル音声のテクストを目で追いながら，できるだけモデルに忠実に再現するように注意を促した．幸い，用意されたモデル音声は通常のスピードと，少しスピードを遅くしたものの二つが用意されていたため，通常スピードでリピーティングすることが難しい学習者も，スピードを遅くしたモデル音声をリピーティングすることができた．このリピーティングを一つのテクストあたり，6回ほど行い，英語特有のイントネーションや音素の定着を図った．

以上の活動の後，③のシャドウイングに移ったのだが，ここで問題が発生した．それは，教室備え付けの音響設備がないため，モデル音声の出力を，ポータブルCDプレーヤ一つで行ったため，学習者は周囲のリピーティングの声に妨害され，モデルの音声が聴こえ難い状況に陥ってしまったのである．人数分のヘッドフォンが用意された LL 教室ではこのような状況は起こりえないが，ここではシャドウイングを普通教室でおこなうことを前提としているので，このような状況はやむをえない．そこで，クラス・マネージメントのレベルで問題解決するため，クラス全体でのシャドウイングは行わず，6 人程度の横一列を一つのグループとし，そのグループ単位でシャドウイングを行った．そうすることで，周囲の声による妨害は多少回避できたが，新たに次のような問題に直面した．

① シャドウイングを行っていない学生は何もすることがない
② シャドウイングを行っている学習者は人前で発話をしなければならず，それを恥ずかしく思う学習者もいる

①に関しては，テクストの筆写や暗記といった課題を与え，後にテストすることにより，一定の解決を得られた．しかし，この方法では一人当たりのシャドウイング回数が，極端に少なくなった．

一方，②に関しては，シャドウイングの活動が学習者の情意面に悪影響を及ぼしていると考

えられる．したがって，そのような学習者が周囲の目を気にせずにシャドウイングを行える環境を作らなければならない．

以上の2点を解決するにはやはりLL教室でおこなうように，クラス全員が一斉にシャドウイングのトレーニングをしなければならない．しかし冒頭で述べたように，音響設備などのハード面がそろっていない普通教室では，そのような活動は難しい．考えられる解決としては，パソコンの記録媒体であるUSBメモリと音楽再生機能が一緒になったものを，クラス全員が保有し，それぞれがそのメモリに入った音声を，ヘッドフォンを通して聞きながらシャドウイングするということが考えられるが，コスト面からも難しいと考えられる．しかし，このようなパソコン周辺機器等は年々高性能化および低価格化し,不可能な解決策ではないように思われる．今後の動向に期待したい．

5．3　今後の課題

以上にリスニング力向上のための方法としてシャドウイングの実践について述べてきた．その学習効果については計測実験を行っていないため，はっきりとしたことは言えない．しかしシャドウイングを実践する前にくらべて，実践して半年後には学習者による英語の発声の音量が大きくなったように感じられる．これは継続してシャドウイングすることにより，英語を発声することに抵抗を感じる学生が少なくなったからではないかと推測される．先に述べた問題の解決を含め，これからはシャドウイングの効果を実証する研究をおこなう必要がある．これらを今後の課題として，シャドウイングの研究に取り組む予定である．

6．まとめ

高専のみならず，大学などの高等教育機関の英語教育にとって，TOEIC は，いわば黒船のようなものかも知れない．書き言葉偏重，訳読式教授法全盛の時代は確実に終わった。いかに迅速かつ的確に英文（音声・文字）を処理することができるか，その能力を伸ばすことが英語教育の大きな柱の一つとなった．この状況には，ある種，有無を言わせぬ強制力があり，高専も例外ではない．

このような能力・技能を伸ばすためには，そのための訓練が必要である．そして訓練をおこなう以上,どのような効果があったかを評価し,そして問題点を改善したうえで，再び訓練をおこなっていく，という基本的なサイクルを確立することが必要である．本論は現時点での取り組みの一端を検討したが，全体として，まだこのサイクルを確立できているとは言い難い．更に検討を積み重ねる必要がある．

ただ，TOEIC は一検定試験に過ぎないことも忘れてはならない。世界にはこの黒船を派遣した国以外にも，数多くの国々があり，様々な文化を持つ人々が生活している．高専における英語教育も様々な目的と目標を持った教育活動である．それらの目的・目標を常に念頭に置いたうえで，TOEIC を視野に入れた活動を積極的に授業に取り入れてゆくことが必要であろう．

参考文献

井上英俊(2004)「コミュニケーション能力とTOEIC --- 特に学習上の困難点に焦点をあてて---」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』，23，117-124.

門田修平（2002)，『英語の書きことばと話し言葉はいかにかんけいしているか：第二言語理解の認知メカニズム』，東京：くろしお出版.

関東信越地区高等専門学校（編）(2002)，『国立高等専門学校協会平成 13･14 年度教育方法改善共同プロジェクト --- コミュニケーション能力育成を主眼とした高専英語教育のありかた ---中間報告書』，［国専協(2002)］

倉本・松村（2001)，「テキスト提示によるシャドウイングとリスニング力との関係」，『外国語教育メディア学会第 41 回全国研究大会発表論文集』，pp.239-242.

高専英語教育に関する調査研究委員会（編）(2002)、『高等専門学校における英語教育の現状と課題---新しい高専英語教育を目指して---』（「高等専門学校の特色を生かした英語教育カリキュラム作成に向けての企画調

査」（平成 13 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（１））課題番号 13898006）調査報告書）.[COCET(2002)]
JACET8000 基本語改訂委員会（2003）『大学英語教育学会基本語リスト（JACET 8000）』東京：日本大学英語教育学会全国高等専門学校英語教育学会.
大学英語教育学会基本語改訂委員会（2004）『JACET 8000 活用事例集：教育と研究への応用』東京：日本大学英語教育学会.
玉井（2002）「シャドーイング訓練効果の所在について　JACET リーディング研究会 2002 年 1 月例会口頭発表」，関西学院大学
西田（1984），「リーディングの能力」，『英語のリーディング』，東京：大修館書店. pp.22-43.
柳原由美子(1994)，「英語聴解力の指導法に関する実験的研究：シャドウイングとディクテーションの効果について」，『Language Laboratory』第 32 号，pp73-89.

教材

木村哲也，他（著）(1999)，『TOEIC テストスーパートレーニング　文法・語法・正誤問題編　TOEIC テストスーパートレーニング』東京：研究社.
『えいご漬け』Plato.
木村恒夫，他（著） (2003)，『TOEIC テスト新模試 600 問- 模試 3 回分の予想スコア付き』東京：アルク.
花本金吾（2001）『英熟語ターゲット 1000（３訂版）』東京：旺文社.
ジオス教材開発研究室編（2003），『しゃべりたい人の英語の教科書入門編』東京：ジオス.

注

1) 本論は平成 16 年度プロジェクト研究（PG-4）の助成を受けている。各章の執筆担当者は以下のとおりである：平岡（1，2，6 章），鳥越（3 章），畑（4 章），森（5 章）。
2)「独立行政法人国立高等専門学校機構の中期計画」(http://www.kosen-k.go.jp/b_01.html）